

コンタクト・ゾーンを誘発し演出するトルコ絨毯

田村うらら

1 はじめに

トルコ絨毯¹⁾は、ここ数十年来、「遊牧民の遺産」「母から娘へと受け継がれてきた」「素朴で力強い」などという表現で、欧米や日本、あるいはトルコ国内でも紹介され、販売されてきている。そこには、他者を非歴史化するオリエンタリズムが垣間見える。もちろん、遊牧民によって細々と織られてきた絨毯もないわけではない。しかし、5世紀以上の長きにわたり、交易品として異文化世界へ持ち出されてきたトルコ絨毯の流通と消費の歴史を追うと、絨毯が多種多様な民族と関わり、文化を横断し異文化からのさまざまな「まなざし」を受けながら発達してきたことがわかる。また、生産の場面に目を移すと、都市部の工房や工場のみならず遊牧民が定着したとされる村落部においてさえ、近代以降、絨毯生産における西欧世界との直接的な接触が認められる。それは、西洋人が他者のモノを渴望することによって生じた「コンタクト・ゾーン」[Pratt 1992]であり、そこでは異文化が出会い、葛藤や受容を経て変化が生まれる。欲望を掻き立てる他者のモノ、外部のまなざしとローカルな価値観の相克を経て変化するモノ、文化越境や変化を通して異文化の出会いを演出し、さらに人びとの欲望を掻き立てるモノ。いうなれば、トルコ絨毯は「コンタクト・ゾーン」を誘発し演出してきたモノなのである。そして、その接触を通じて起こった変化さえも、モノの作り手たち自身の「伝統」やローカルな習慣のなかに取り込まれてきた。

本稿の目的は、トルコ絨毯の数世紀にわたる比較的緩慢な「グローバル化」の様相をふまえたうえで、絨毯生産地域村落部における事例をとおして、ローカルな文脈で異文化が邂逅し、葛藤や受容を経て変化を生み出す「コンタクト・ゾーン」について検討することである。まず、トルコ絨毯の異文化世界への流出の歴史について概観する。次に、産業革命を経て資本主義化したヨーロッパ諸国の資本がトルコ国内の絨毯産業に流入した経緯を説明する。最後に、西アナトリアの伝統的絨毯生産地として数えられるミラス地方の近代以降の資本主義世界との接触と変化について、フィールドワークのデータを中心としたミクロな視点から検討する。

2 15-19世紀初頭、ヨーロッパにおけるトルコ絨毯

ペルシア絨毯とともに世界の絨毯の2巨頭というべき、トルコ絨毯は、遅くとも15世紀以降には、ヨーロッパに輸出されていた[杉村 1994:18]。また、オスマン帝国宮廷付きの工房で織られたトルコ絨毯の一部は、各地の元首たちへの贈答品としても用いられた。当時の東地中海一帯とヨーロッパ間の交易は、地中海を横断してイタリアやスペインに到達するルートと、黒海からドナウ川さらにライン川流域を経てオランダ低地帯に抜けるルートが主であった。前者においては主として海洋都市国家のヴェネツィア人、後者においてはイスラーム世界とキリスト教世界を横断する陸上長距離交易において広いネットワークと高い手腕を誇ったアルメニア人商人によって担われていた[カーティン 2002:254-257]。そして絨毯も、彼らの手を介してヨーロッパに持ちこまれていた。当時ヨーロッパに輸出された絨毯で現存し、かつ来歴もわかるものはごくわずかである。また、絨毯は19世紀末まで生産性も上がりにくく香辛料や生糸のように主力の交易品となることがなかったからであろう、絨毯の流通量や詳細な経路については恒常的な記録がほとんどなく、わからないことが多い。トルコ絨毯のヨーロッパへの流入時期や、受容の様子が裏付けられるのは、当時のヨーロッパの画家たちが多く残した絵画におけるトルコ絨毯の描写によってである[Aslanapa 1988; Quataert 1993; 坂本 2003]。

トルコ絨毯(アナトリア絨毯)は、ロレンツォ・ロットー(1480-1556)やヴィットーレ・カルパッチョ(1455頃-1525頃)、ジェンティーレ・ベッリーニ³⁾(1429-1507)ら15-16世紀初頭のイタリアルネサンス画家、あるいはハンス・メムリング(1430-1494)、ヤン・ファン・エイク(1387?-1441)らのフランドルやネーデルランドの画家たちによって盛んに描かれた。彼らの絵におけるトルコ絨毯の典型的な描かれ方は、幼子イエスを胸に抱く聖母マリアの足元に広げられているという構図である(図1)。もともと十字軍遠征によってイスラーム世界の絨毯の存在を知ったとされる西洋人が、キリスト教の宗教画において、しかも最も神聖な対象を引き立たせる小道具として異教世界からのモノを用いたわけである。あるいは、イタリアルネサンス画家の手によるものでは、ヴェネツィアの町並みのなかで、邸宅の窓やバルコニーからこれ見よがしに掛けられている様子も共通した描かれ方である。東地中海を中心に、海上交易で繁栄した当時のヴェネツィアにおいて、トルコ絨毯は富の象徴であり、富裕層はし



図1 ジェンティーレ・ベッリーニ作(15世紀末)『玉座の聖母子』(*Madonna con il bambino in trono*) [Mack 2001:83]。

ばしば絨毯を窓から外に掛けて財力を誇示したという [Mack 2001]。また、ドイツに生まれ英国で活躍したハンス・ホルバイン（1497/98-1543）は、トルコ絨毯の上にポーズをとる王侯貴族の全身人物画を多く残し、ルーベンス、フェルメール、レンブラントら17世紀オランダ画家なども、上級官吏や貴族たちとともにトルコ絨毯をテーブル掛けなどの室内装飾として描いた。

19世紀初頭までは、以上のようなヨーロッパにおけるトルコ絨毯の受容および消費の形態が継続した。それは、交易によってもたらされる高価な稀少品であり、だからこそ、富や地位を象徴するモノとなっていた。また、しばしば「高貴さ」や「神聖さ」と結びつけられもした。そしてトルコ絨毯を手にするのは、一部の上層階級にのみ許された贅沢であった。それは、トルコ国内に散在する伝統的生産地の織り手たちや、宮廷付きの職人たちが手間と時間をかけて紡ぎ、染め、織るという生産形態に頼っており、常に供給過少気味であったのだから、当然である。もっともこの時期、生産における一定の変化はあった。特筆すべき変化は、16世紀のウシャック絨毯に、ペルシア絨毯の模様（中央に菱形メダリオンの草花模様）が移入されたことである。これは、1514年にサファヴィー朝のタブリーズを征服したセリム1世が、タブリーズのペルシア絨毯職人たちを連れ帰り、オスマン宮廷付きの工房で働かせたことに端を発している [Aslanapa 1988:103]。これによって、主として宮廷工房への染色技術やデザインの移入が行われた。ただしこれらの変化は、帝国内の需要を満たすために行われた変化であり、生産形態そのものを変えるものではなかった。ところがトルコ絨毯をめぐる状況は、ヨーロッパにおいて産業革命が起こり、大量生産が行われ、やがて中産階級が肥大化してきたことにより、急変することとなる。

3 産業革命以後のトルコ絨毯をめぐる状況

イギリスで産業革命が始まり、消費社会が成熟してくるにつれ、新たに出現した中産階級は、獲得した商品購買力を用い、従来の上層階級の生活に物質的な豊かさをもって迫ろうとした。上層階級の持ちものであり、絵画にも度々描かれてきたオリエントの絨毯は、彼らにとって格好の標的だっただろう。しかし、肥大化する中産階級の絨毯需要に追いつくほどの生産体制は、当時のオスマン帝国には存在しなかった。するとヨーロッパ資本は直接、オスマン帝国内に進出してきたのである。これは、トルコ絨毯の歴史における大きな転換点である。本章では、この需要の伸びの背景と欧州資本の流入についてマクロレベルで見てゆくことにする。

オスマン帝国において対ヨーロッパ絨毯輸出ブームが始まるのは、1860年代のことである。その背景には、1851年のロンドンにおける万国博覧会に続き、パリ（1855年、1867年、1878年、1889年）、ロンドン（1862年）、ウィーン（1873年）、フィラデルフィア（1876年）等、欧米各地での万国博覧会における、トルコ絨毯やペルシア絨毯の展示販売があった。それまでごく一部の富裕層の贅沢品であった絨毯が、中産階級に爆発的に広まってゆくことに対して、万国博覧会が果たした役割は大きい（[Quataert 1986, 1993; 坂本 2003], 図2参照）。なお、その時期はイギリスのウィリアム・モリスらを中心としたアーツ・ア

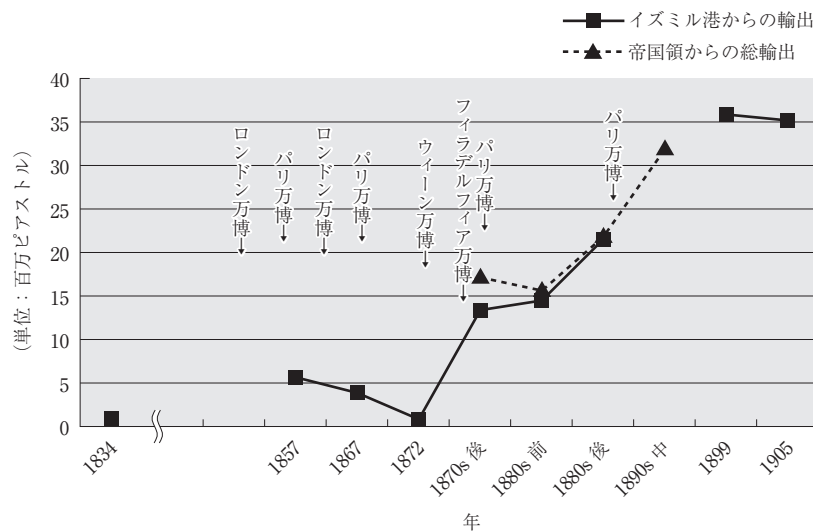


図2 オスマン帝国とイズミル港からの絨毯輸出額の推移と万国博覧会 (1834-1905)
Quataert [1986, 1993]。Issawi [1980] をもとに筆者作成。

ンド・クラフツ運動ともほぼ重なっている。カーペット・ブームとアーツ・アンド・クラフツ運動。それは時代の偶然の一致ではない。産業化社会における、文化の急速な均質化と生活への大量生産品の蔓延に「根無し草感」を経験した西洋の人びとが、他者の民族工芸に「オリジナルさ」「真正性」を求めて熱狂した、当時の一連の流れに与する現象と見てよいだろう⁴⁾。

ヨーロッパにおける絨毯需要の飛躍的な伸びに合わせるように、トルコ絨毯は19世紀後半の間にめざましく生産量を伸ばした。エーゲ海沿いの大貿易港であるイズミルの後背地には、クラ、ウシャック、ギョルデシュ、デミルチ、ベルガマなどの羊毛絨毯生産地がある。それら西アナトリアの各地は、数世紀にわたりアルメニア商人が活躍した隊商路沿いにあり、また多くはアナトリアの初期の鉄道沿線にあった。アナトリアの鉄道は、19世紀後半から、ほとんど英国資本に依存しながら敷設されていった。トルコ国内各地の絨毯は、鉄道網を利用してイズミルに運ばれ、イズミル港からヨーロッパに向けて輸出された。イズミルからの絨毯の輸出量は1890年代後半から1913年までの間に、8倍にも膨れ上がった⁵⁾ [Quataert 1993]。当時の商会の多くはイギリス・フランス・イタリア資本であり、国内流通において活躍したのはギリシア・ユダヤ・アルメニア系住民であった [Quataert 1993; 坂本 2003]。1908年にイギリスなど西欧資本の6つの商会在合同して、オリエンタル・カーペット製造会社 (The Oriental Carpet Manufactures Ltd., 以下 OCM とする) がイズミルに設立された。それによって、各国商会間の競争をやめ共同して利潤を追求することが目指され、国内各地に次々と直営工場や工房が建設された。また、OCM は、パリ、ニューヨーク、ロンドンなど海外にも支店を展開し、輸出先での販路確保にも力を注いだ [Sönmez 1998:296]。同社は飛躍的にシェアを伸ばし、第一次世界大戦直前の1913年には、アナトリアで生産される絨毯の約4分の3を独占し [坂本 2003]、イズミル港より輸出される絨毯の実に90%を独占した [Sönmez 1998:297] という。

このように、欧米に端を発する「カーペット・ブーム」に乗って、トルコ絨毯の生産は

急激な伸張をみたが、それは合理的経営を進める欧州資本の商会の主導によって可能になった。以前は交易によってもたらされたものが消費されていたが、今度は需要の膨張を受けてオスマン帝国領内に巨大欧米資本が流入し、生産や流通を直接管理するようになったのである。

4 絨毯をとおして村人が接触した「近代西洋」——ミラス地方の事例より

前章まで、トルコ絨毯が交易を通じてヨーロッパへもたらされた経緯、および近代以降のトルコ絨毯生産へのヨーロッパ資本の直接の流入について概説した。本章ではまず、以下の探求の舞台であるミラス地方もまた、こうした流れと無縁ではないことを指摘する。次に筆者が2005-2006年にミラス地方で行った現地調査をもとに、同時期のよりローカルな村レベルでの「近代西欧」との接触について見てゆく。

4-1 ミラス絨毯の交易のあと

トルコ共和国南西部ムーラ Muğla 県ミラス Milas 地方（図3参照）は、トルコ絨毯の伝統的産地のひとつとして数えられる。現在も、ミラス市、海岸のボドゥルム Bodrum、オレン Ören で囲まれた一帯に散在する100あまりの村々の過半数において、絨毯の家庭内生産がなされている。一帯の村落部における主要な生業は、オリーブの商業的生産、牧畜、近郊リゾート地への出稼ぎである。ミラスには、ウシャックに存在したような大規模な官営／外資系工場は建てられなかったものの、欧米で次々と「カーペット・ブーム」が起こった19世紀後半からごく最近の1990年代にかけて、ミラス一帯からミラス、イズミル



図3 トルコ共和国およびミラス近郊地図

あるいはイスタンブールの仲買人の手を介して欧米諸国へ多くの手織り絨毯が送り出された。

さらに時代を遡れば、現在のルーマニア、トランシルヴァニア地方の、プロテスタント教会や博物館（たとえばブラショフにある「黒の教会」など）に合計400点近く残る15-18世紀に織られたトルコ絨毯の一部は、そのデザインからミラス産と推定されている [Frances 2007:39]。それらの教会は、アルメニア人やユダヤ人たちが活躍した交易ルートのひとつ、黒海からモルダヴィア、トランシルヴァニアを抜け、アムステルダムへ到達する交易路沿線にある。当時トルコ絨毯は、ドイツからトランシルヴァニアへの入植者である、ザクセン人たち、あるいはマジャール人たちに愛好されていた [Ionescu & Kertesz 2007:33]。彼らは、トランシルヴァニアにおける富裕層であった。そして現在に至るまで教会に非常に良い保存状態で残されていた絨毯は、かつてザクセン人たちによって珍重され、教会に寄進されたものである [Frances 2007:33-34; Ölçer 2007:11]。彼らはプロテスタントの商工業者で、富を築いた成功者たちであった。寄進した者の一族は、ミサの際には壁に掛けられた絨毯の前に並ぶ席に陣取ったという。貴重品であった絨毯を、教会に寄進することは信仰心の表れでもあり、社会的威信の表現でもあっただろう。筆者は写真で見たにすぎないが、天井の高い教会の壁一面に、回廊に掛けられた絵画のように、ムスリムトルコ人が織った絨毯——それも礼拝のときにメッカの方向に向けるための上下非対称デザインのものなど——がずらりと掲げられているその光景は、圧巻である。

他の西アナトリアの絨毯伝統的産地の例に違わず、ミラス地方の村々で織られた絨毯も、産業革命のはるか以前からさまざまな文化的背景をもったエイジェントを介して、国外へ輸出され文化／宗教を越えて愛でられていたのである。

4-2 カラヂャヒサル村——その絨毯と工房

では、話を現代のミラス地方に移そう。2005年6月、筆者がミラス市の絨毯商を回って話を聞いている間、典型的なミラス絨毯と明らかに特徴の異なる絨毯があり、ひときわ目をひいた。ミラス絨毯というと、淡い黄色、深いボルドー、くすんだ深緑を基調色として、長方形の枠を幾重かに重ねた構図に、動物の足跡や蟹、鋸などを模した独特のモチーフあるいはミフラブ文⁷⁾が展開されるのが特徴である。白が用いられるのは、モチーフのなかのごく一部に限られる。ところが筆者の目に明らかに「場違い」に映ったそれらの絨毯は、白地に絡みあうような花モチーフが大きく中央と四隅に配されたもので、構成、配色、モチーフ、いずれをとってもミラス絨毯とは何の係累もなさそうであった（写真1参照）。他地域か他国のものを例外的に扱っていると思ったほどである。ところがどの店にも置いてある。問えばミラス市南方のカラヂャヒサル村 Karacahisar Köyü の絨毯だという。地元ミラス地方での呼び名も、カラヂャヒサル型 Karacahisar *tipi*、あるいは構図の特徴（中央のひし形の花模様）からヘソ付絨毯 (*göbekli halı*)、当該村内においては色の特徴から白絨毯 (*beyaz halısı*) などといい、他のミラス地域の絨毯とは区別されている。なぜその村の人だけがこのような絨毯を織るのだろうか⁸⁾。

カラヂャヒサル村は、ミラス市の南約22 km に位置し、南側のカラ山、東側のアサル山に囲まれた台地上に形成された村である（図3参照）。村の人口は708名（2000年）でミラ

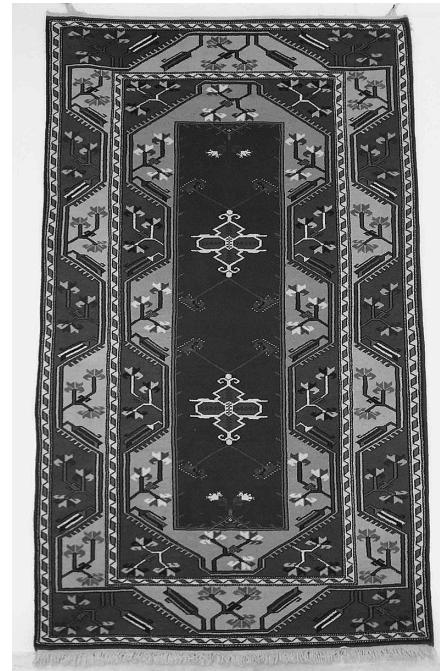


写真1 カラヂャヒサル村の花柄絨毯（左）とミラス地方典型デザインの絨毯（右）。

ス郡下の村としては比較的規模が大きい。1970年代にミラス市から村への道路が開通し、現在は乗り合いミニバスを使えばミラス市から30分あまりで村に行くことができる。ただし車両用の道路の開通前にも、ラクダやラバを用いた交通が盛んで、村からはミラスや積出港のあるギュルリュック湾に通じる旧道があった。

ミラス市内で収集した文献によれば、同村に1896年 OCM の工房（*atölye*）が建てられた⁹⁾。工房が解散する1919年までの間、村のほぼ全世帯の女性たちが、その会社の仕事を請け負っていたという [Anmaç 1994]。また、別の文献にも「カラヂャヒサル村に建てられた工房によって、市場向けの絨毯生産が始まった」とある [Taşkıran 2004:136]。あるいは、1954年にミラス地方史を編纂したアカルヂャ夫妻の記述からも、その工房の開設と影響を窺い知ることができる。

1896年ごろ、同年前後に設立されたある会社が、ウシャックから染色職人と Harlambo という名のデザイナーおよび45の織機を移入したことにより、カラヂャヒサルの絨毯業は完全に異なる方向へと向かった [Akarca 1954:41]。

この「完全に異なる方向」というのがすなわち、市場を意識した生産のことと考えられる。そしてそれが最もわかりやすい形で現れるのが、花柄絨毯の特異なデザインである。その柄は、素人目にも明らかなほど、ミラス地方一般のものから隔絶されている。実際に村でカラヂャヒサル型の絨毯の来歴を尋ね歩けば、人びとは「いいだろう、これが我々の村の絨毯さ」と誇らしげにその花柄絨毯の実物を見せると同時に、そのデザインが、もとは外から村にきたものであると言い添えるのだった。至極当然のように、「私たちのもの」と「外来のもの」が結びつけられて語られた。そして村に滞在するうち、文献にあった工

房で働いていたデザイナーの子孫にあたる一家と懇意になった。以下は、そのデザイナーを祖父に持つアフメット・コザック Ahmet Kozak¹⁰⁾氏(男性, 2006年当時77歳)へのインタビューの一部を再構成したものである(〔 〕内は筆者。以下同様)。

19世紀末にユダヤ人たち(Yahudiler¹¹⁾)が村に機を持ってやってきて、絨毯の工房を建てた。朝から村のたくさんの女性たちがそこへ行き、その日の織りあげた目の数に応じて〔出来高制で〕賃金を得た。

そこへ1910年から1912年のいずれかにウシャックの絨毯工場からデザイナーとして派遣されてミラスにやってきたアテネ出身のひとりの男、つまりギリシャ人が村の工房で働くようになった。彼はアテネからまずウシャックに来て、そしてミラスにやってきた。アトリエのユダヤ人たちと共同経営ではなく、彼らからウシャックの会社からかは知らないが、デザイナーか技師か職人かの身分で雇われていたはずだ。

彼はデザインを熱心に描き、自分で糸を染め、描いたデザインを織って次々に新しいユルギュット¹²⁾〔柄見本絨毯¹³⁾〕——つまりトルコ語で *örnek*, ——を生み出した。それが私たちの祖父にあたる。

隣の部屋の壁に掛かっている大きな柄見本絨毯は、1915年に彼が染めデザインして織ったものだ。絨毯の糸は、イギリスから輸入された粉状の染料を用いて染められた。色の具合は地元の天然染料も試しながらずいぶん研究したようだ〔その色糸見本、染め糸がグラデーション状に並べられ白の厚紙に貼り付けられたものを見せてもらう〕。

ユダヤ人のアトリエの機は、それまでの外国人のトルコを無きものにしようという動き、〔欧州列強の〕日増しに力をつけてゆく状況に我慢がなかった村の若者たちによって、トルコ共和国建国の前後に、破壊された〔時期は1919-1923のある時点と推定される〕。ユダヤ人たちは、村を去った。そして工房に残された機は、村の各戸に持って行かれ、見本絨毯も同様に持ち去られた。そして女たちはずっとそれらを互いに見せないようにしてこっそり織ってきた。もちろんさ、競争だからね。

1919年以降、「事件」のあと、そのデザイナーは40歳を過ぎてからムスリムに改宗しトルコ人化して(*Türkleşmiş*) 地元の娘と結婚した。改宗した後のトルコ名はメフメット・マーヒル Mehmet Mahir であった。ここで結婚した祖父には、一人だけ息子ができた。他はいなかった。(2006年11月17日、氏の自宅にて)

末尾に登場する「一人息子」が、すなわちこれを語ったアフメット氏の父親である。筆者が探索した限りにおいて、同村への工房設立とその経過についてこれほど詳述されている記録はない。当時を経験した世代は既に絶え、アフメット氏の語りも当然聞き覚えであるが、氏の絨毯への興味の強さ、断片的な地方史の記述との整合性、そして一家に残された柄見本絨毯や色見本、染色に用いられた数々の染料や薬品の容器などのモノとの整合性などから、かなり信憑性が高いと筆者は判断する。なお、アフメット氏の息子の補足によれば、メフメット氏は、1937年ごろ村にて亡くなったという。メフメット氏の一人息子も、父のように染色の研究に精を出したが、時勢の変化もあり材料が安定したルートから手に

入らず、工夫を重ね続けたらしい。

いずれにせよ、ユダヤ人たちが建てた絨毯工房は、村にさまざまな新しい経験やモノをもたらしたと考えられる。ここではそれらのうち、特に重要と思われる三点について取りあげたい。「異人」との共在、女性の賃金労働、そして幾種もの新しいモノの受容である。まず何よりも、20年以上にわたって村にムスリムのトルコ人以外の者が恒常的に住み、村人たちと接触をもったことは特筆に値する。18-19世紀には、ミラスの町には相当数のユダヤ人やギリシャ人たち「異教徒」が住んで主に商業手工業に従事しており、村々へ出入りした絨毯の仲買人の大半も彼らであった [Tüfekçi 2005: 30-41]。そのため、村人たちにとって、織機とともに村へやってきたユダヤ人たちは見たこともない存在ではなかっただろう。とはいえ、たまに町で見かけたり村を訪れたりする程度ではなく、継続して同じ村に住み、同じ場所で働くという恒常的な共在状態の出現は、村の日常にとって画期的なできごとであったに違いない。

それでも、第一次世界大戦末期までは、特に大きな軋轢もなく過ごしていたようである。それは、村の女性たちが家の外、工房で働いたという証言によっても、また20年以上工房が続いたという事実によっても裏付けられる。ところが第一次世界大戦敗戦前後のナショナリズムが吹き荒れた時期、村の若者に起こった「外国人」たちへの敵意は、最も身近な「異人」であったであろう、村の絨毯工房のユダヤ人たちに向けられることになった。彼らは「異教徒」ながらもオスマン帝国の公式な住民であり、ムスリムである臣民との共存が許された被保護民（ズィンミー）であった。また近代国民国家の枠組みにおいては、「トルコ国民」とされるべき人びとでもある。¹⁴⁾ところが第一次世界大戦敗戦（1918）によってオスマン帝国領土が西欧列強による分割の危機にさらされ、トルコ民族主義が一層高まったこの時期に、旧来の「ムスリムと非ムスリム」と、新生の「トルコ人と非トルコ人」という対立項が混在した。そして村のユダヤ人／ユダヤ教徒たちはトルコ人の敵、非トルコ人とカテゴリー化されて排斥が起こったのであろう。

ユダヤ人たちは工房が襲撃されて村から去ったが、他方でギリシャ人のデザイナーは残ってギリシャ正教からイスラームへと改宗したという。それをインタビューのなかでアフメット氏が、「ムスリムとなった、つまりトルコ人化した。（中略）そして〔村の娘と結婚して〕ここに残った」と表現した点は興味深い。トルコ民族主義が勃興し「外国人」への敵意が噴出した矢先にも、オスマン帝国のズィンミー制度そのままに、イスラームに改宗することはすなわち「我々〔臣民〕に同化されること」であり、そうしてはじめてムスリム女性との結婚を許される身分となった。そしてイスラームへの改宗は、すなわち「我々と同じ」「トルコ人」となることと等価であったと解釈されている。それは現代に生きるアフメット氏の解釈であるが、宗教国家から近代国民国家への過渡期にあった当時の人びとの間でも同様な感覚があったのではないだろうか。そうであってこそ、デザイナーはユダヤ人のように村を去ることなく、「元ギリシャ人、改宗後トルコ人」は村のなかで受け容れられ、今日まで子孫を残していると思われる。

そして第二に重要なのは、村の女性たちが、農作業などの世帯単位の請負制ではなく、個人として家の外で賃金労働をするという経験をしたことである。当時は自給的農牧畜業

に加えて、綿花やタバコなどの商品作物栽培、養蜂、あるいは鞍職人などこまごまとした村内向け雑業が営まれており、また絨毯を販売して現金を得ていたため、人びとは貨幣経済そのものにはかなり親しんでいただろう。しかし、特に産業のないこの村において、折半小作はあっても賃金労働の機会にはなかった。ましてやムスリムの女性たちが、夫や兄弟たち男性親族の目の届く範囲において世帯単位で農作業する以外に、家の外で働くなど、機会もなければ、想像もされなかったと思われる。それから100年以上経た現在のカラチャヒサル村においてさえ、妻や未婚の娘を外で働かせることを認めない夫や親たちは珍しくない。当時の工房が村内にあったとはいえ、異教徒の男性が切り盛りする工房へ女性が働きに出て現金を稼ぐことへの反撥はなかったのか、どのようにしてそれが受け容れられたのかは謎である。ともあれ、カラチャヒサル村の女性たちは、自分が絨毯を織るという作業が直接的に賃金となって返ってくる——それが女性本人の手にそっくり残らなかったとしても——という新しい経験をした。それは、それまで農作業や家事の合間に自宅で織っていた絨毯が、時折やってくる仲買人に売却されて現金が世帯——つまり夫や父親など男性家長の懐——に入るのとは、男性にとっても女性にとってもまったく別の経験であったと思われる。労働そのものが現金と交換された点、そして女性が世帯経済に寄与していることがより鮮明に可視化された点において。

そして第三に、工房の経営が村にもたらしたさまざまなモノたちがあった。具体的には、人工染料、既成糸、銅鉄製の織機¹⁵⁾、複雑な花柄デザイン（写真2参照）、である。人工染料は、1856年にイギリスでアニリン染料が発明されたのに続き、1868年にドイツで天然染料と同等な人工染料アリザリンの合成に成功し、工業的に製造される安価で手間のかからない人工染料の使用が急速に広まった。オスマン帝国内にも、19世紀のうちにアニリン染料（1882～）、アリザリン染料（1894～）が輸入され、それらは外資系の絨毯産業から導入されていった〔テズジャン1980: 237; Quataert 1986〕。

ではカラチャヒサル村に開設された当時の絨毯工房では、どのような糸と染料が使用されていたのだろうか。村の工房で用いられる糸も染料もすべてあらかじめ用意されていたといい、村内で行われる作業は、デザイナーによる糸の染色と、女性たちによる織り作業のみであった。おそらく糸はウシャックなどであらかじめ紡がれた未染色¹⁶⁾のものが持ちこまれ、村で人工染料を用いて染められていたのだろう。染色については、ウシャックから染色の職人（メフメット氏のことであろう）が連れてこられたという記録や、デザイナーのメフメット氏



写真2 デザイナーのメフメット氏が残したとされる花柄絨毯の柄見本。

が村で発色や混色を研究しながら染めていたというアフメット氏の証言、あるいは当時染色に使われた硝酸など劇薬を含む薬品の瓶が一族の家に残されていることなどから、当時使用された染料は広く一般に使用できる状態のものではなかったと思われる。おそらく、毒性があり扱いも難しいアニリン染料か、初期のアリザリン染料であったのだろう。

また、それまでのミラスの典型デザインのものとはまったく異なる複雑な花柄デザインをまのあたりにし、さらに自分で織った人びとは、それをどのように捉えていたのだろうか。直接に証言を得ることはできないが、工場が襲撃されたあと、人びとは花柄の柄見本絨毯を嫌悪して破損させたり廃棄したりはしなかった。それどころか、工場の閉鎖とともに1枚ずつ各戸に持ち去り、それが互いに異なる「一点もの」であったがゆえに、世帯外の人には見せないようにして織り続けたという。もともと「外から来た」その柄に対して、嫌悪からはかなり遠い感情を人びとは抱いてきたように思われる。この点に関しては、次章において検討したい。

以上のように、カラチャヒサル村に19世紀末に絨毯工房が開設されたことによって、村は新たなモノや現象を経験した。それは、異教徒との日常的な共在であり、村の女性の賃金労働であり、また市場経済への適応の必要性が生み出したさまざまなモノであった。ナショナリズムの勃興とともに、工房が閉鎖され、ユダヤ人たちが去ったとはいえ、その後人びとが市場経済から隔絶された世界に生きてきたわけでは、もちろんない。次章では、同村における現在の絨毯生産と消費のありかたをとおして、工房閉鎖以降の変化を考察する。

5 カラチャヒサル花柄絨毯の現在——村内の消費と生産

西欧資本の工房によって村に持ちこまれた花柄絨毯は、現在の村人たちにとってどのような存在なのであろうか。本章では、まず村の絨毯消費一般の場面に目を移したのち、花柄絨毯とその他の絨毯に関する人びとの扱いかたの相違について検討する。さらに生産の場面にも目を向け、最後にその接触のもたらした外来要素が、現在の人びとにとっての「伝統」に与えた影響について考察する。

5-1 「売れない」花柄絨毯と村における絨毯消費の様相

前章でも触れたとおり、特に村外で村の名前が冠されて呼ばれることの多い花柄絨毯は、筆者に対して「我々の村の絨毯」「我々の絨毯」として誇らしげに披露された。老若男女を問わず、この誇らしげな態度が目立っていた。ではそれは現在、他者の「まなざし」を意識しつつ、この村の特産品として積極的に売り出される商品なのであろうか。答えは否である。実際のところ、「花柄絨毯は売れない」「ミラスの伝統的デザインの方が売れる」という、商品としては否定的な語りが、同地方を拠点とする何人もの絨毯商や、カラチャヒサル村の村人自身から聞かれた。以下はその一例である。

絨毯商 A

その白絨毯ね、そう、カラヂャヒサルのものだよ。これはダメだね。売れないよ。いろんな好みの人がいるだろうと思って買ってはみたけど、〔1枚を指差しながら〕これなんてここにもう12、13年はある。今在庫でうちには6枚あるけど、1枚くらい売れてもすぐにカラヂャヒサル絨毯を補充するつもりはないね。最近もカラヂャヒサルに買いつけに行くことはあるけど、僕は白絨毯なら見もしないよ。どうして売れないか？それは背景が白いだろ、乳白色。こんなのすぐ汚れてしまうって言う人もいた。だけどやっぱりミラスで絨毯を買いたい人は、ミラスの地元のデザインがついたものを買いたいんだよ。市場を向いた（*pazara yönelik*）花のついたやつじゃなくてね（2006年11月14日、ミラス市郊外に店舗を構える、ある大きな絨毯商にて、村への買いつけと販売の双方をこなす30代男性従業員の語り）。

カラヂャヒサル村民 B

〔自宅の花柄絨毯の上に座り、手でさすりながら〕より手間はかかる（*daha zahmetli*）けど——だってほら見て模様が複雑でしょう——それでも白絨毯は、我々の絨毯。娘を嫁に出すなら嫁入り道具には絶対必要だし、息子にだって織ってやるさ。それにきれいだと思わないかい？でも売れないね。私にはよくわからん。どうしてより手間がかかっているこの絨毯を、同じサイズのミラスの絨毯と同じ値段でしか買わないというのか。昨日来た仲買人なんて、白絨毯を私が出してくるのを見た途端、こうやって〔と顔をしかめて否定する手振り〕帰って行ったさ。値段も言わないのにね。これなんて、手紬ぎだし天然染料だし、真っ白でこんなに丁寧に織ったのに（2006年12月10日、カラヂャヒサル村の50代女性の語り）。

現在カラヂャヒサル村では、花柄絨毯も、また他村と共通するミラス地方特有のデザインの絨毯も、ともに生産され消費されている。人びとは、花柄絨毯が「売れない」「労力に見合う値がつかない」とぼやきながらも、複雑な模様の絨毯を織ることをやめないのである。いったい何が、彼女たちに花柄絨毯を織らせ続けるのだろうか。それは、市場流通に載せるという目的のみからは説明をつけられそうにない。その手前、村における消費のありかたに注目する必要がある。そのためにまず、花柄に限らず村内で生産される絨毯一般のさまざまな用途や消費の特徴について概観する。

（1）使用財

トルコの人びとの住居において、絨毯は必需品である。特に村落部を中心として、床座を基本とする伝統的な生活様式が営まれており、家中の床に絨毯が敷きつめられているのが普通である。もちろんカラヂャヒサル村においても同様である。夏季は家の屋上や、半屋外のバルコニーのようなスペースで団欒したり就寝したりする際にも、必ず絨毯が運び出されて敷かれる。人が多く集う時などに、誰かが遠慮がちに絨毯のない部分にはみ出して座ったりすると、即座に誰かが「こっちへおいで、地面（むき出しの床）に座るもんじゃない。病気になるよ」と声をかける。カラヂャヒサル村では現在、特に大きな部屋には

機械製の絨毯が購入されて敷かれることも多い¹⁷⁾が、その周りの空いたスペースや、廊下、その他のスペースには自家製の手織絨毯が敷かれる。カラヂャヒサル村においても、絨毯は生活に欠かせぬものであり、自分たちで織った絨毯は各戸で、日常的に使用財として用いられる。

(2) 威信財 1 ——持参財（嫁入り道具）

嫁入り道具 *çeyiz* は、トルコ全土に認められ、結婚するまでに未婚女性とその家族はその準備をぬかりなく進めることが期待される。婚礼儀礼の前後の嫁入り道具の「お披露目」もかなり広い範囲で行われ、嫁入り道具の品々は、文字どおり「展示」され、人びとの目に触れる。トルコ人なら誰もが知っている諺、「娘はゆりかごに、嫁入り道具は長持に」(*Kız beşikte, çeyiz sandıkta* [娘がゆりかごにいる時分から、嫁入り道具は準備される]) から、人びとの嫁入り道具にかかる気概やそれがいかに重視されているかを窺うことができよう。なかでも、ミラス地方が属するムーラ〔県〕は、嫁入り道具の慣習が盛んであることで知られる¹⁸⁾。嫁方は、嫁入り道具として新居で使うあらゆるもの——家具家電一式、食器、寝具、生活雑貨、室内装飾品、レース編みなど手芸作品等々——を、娘がまだ幼少のころから地道に準備する。

カラヂャヒサル村を含む絨毯生産村落において、絨毯は嫁入り道具のなかで特に重要な品目であり、その量とできばえは、人びとに娘や母親を「働き者」「器用」と評価させる主たる基準である。「この絨毯の山を見ろ、娘とその母親は、片時もぼうっとして座っていることがなかったらしい」(30代既婚男性)「すばらしい絨毯ね、目が詰まってまっすぐで本当にきちんとしている。さすがはあの親子だわ」(40代既婚女性) など、口々に人びとは評価する。

また、「商品として売ってしまわずに」娘に多くの絨毯を持たせてやれる余裕があることは、一家の経済的威信の表れである。その評価は当人たちに対してあけすけになされることはないが、嫁入り道具披露の帰り道に、「やっぱりあの一家はすごいなあ。あの花嫁の持って行った絨毯を見たかい？絨毯を売らなくてもあれだけ冷蔵庫も洗濯機も買えるなんて、さすが金持ちだよ」(20代未婚男性)とか、「娘は働き者のはずなのに、[親が]あれだけしか絨毯を持たせなかったのは気の毒だね。まあ稼ぐ男兄弟もないし、金持ちでもないから仕方がないか。」(50代既婚男性) ¹⁹⁾などと話されるのを筆者は聞いた。

婚礼直前に、嫁入り道具を娘の生家から運び出す際は嫁方婿方双方の親族と隣人が大勢参加し、チンゲネ (*çingene*) と呼ばれる人びと²⁰⁾の音楽隊も雇われて盛大に行われる。嫁方近親者が、絨毯を持って行こうとする婿方親族に対し、それを手で押さえながら拒絶を示して金銭を要求し、満足するだけ支払われたら引き渡すという儀礼的交渉²¹⁾が行われる。これは数多い嫁入り道具の中でも、絨毯に対し必ず行われる。以上のように、カラヂャヒサル村を含む一帯の村落部において絨毯は、持参財として非常に重要視されており、それは一家の社会的・経済的威信を示すための威信財と捉えることができる。

(3) 威信財 2——葬礼用、寄進財（オリュムリュック）

アナトリアに広く見られる習慣に、絨毯やキリムなどの敷物を葬礼の際に白布 *kefen* に包まれた遺体の上にかぶせ、そのまま墓地まで運んだあと、死者の近親男性親族によってモスクや礼拝所に寄進する (*bağışlamak*) というものがある。これは神が喜ぶような行為、善行 (*sevep*) と人びとに解釈されており、寄進された敷物はモスクに帰属し、販売は許されない。ミラス地方において、この習慣はあまり維持されているとは言えない。ただし少なくとも村落部において、葬礼の際、死者の家から墓場まで遺体が運ばれる際には、死者の家の絨毯かキリムがかぶせられる。その遺体を運ぶ近親男性に続いて村の男性たちが共



写真3 カラヂヤヒサル村のモスク内に敷かれている、寄進された絨毯。

に墓場まで行進する間、女性たちはその道路脇にずらりと並んで悲しみ、死者を見送る。墓場に死者を吊ったのち、敷物はそのままとの家に戻されることが一般化してきている²²⁾。しかし、カラヂヤヒサル村においては、その家が経済的に困窮していない限り、絨毯を村のモスクに寄進するのが通例である。この習慣とそれに用いられる絨毯は、オリュムリュック (*ölümlük*, 死のためのもの) と呼ばれる。調査当時、カラヂヤヒサル村のモスクの1階床表面部分だけで手織り絨毯が24点、機械製絨毯4点が敷きつめられていた²³⁾ (写真3参照)。またある70代寡婦の女性Cは、自身のオリュムリュックを筆者に見せながら²⁴⁾、こう語った。

オリュムリュックは、死んだ私のこの世の最後の衣装。だからオリュムリュックは好きな柄で、自分で紡ぎ自分で織ったものでなくては、と思った。これは50代で絨毯を織るのが大変になって一旦やめたあと、最後にオリュムリュックは織ろうと決めてゆっくり静かにひとりで織った。57歳の時。すばらしい柄でしょう？私はこの柄を気に入っているのよ。色もそれぞれが調和していい色に落ちついた。これを見るとね、心が落ちつくの。私が死んで、墓場まで行くとき、私の上でこの絨毯をみんなが見るわ。そして、そのあとはモスクでみんなが私の絨毯を見る。祈りに来るたびに、ああ、あれはC婆さんの絨毯だねって。いいねって。そんなふうに想像するとね、なんだか気持ちが静かになるの。私のオリュムリュックはぜったいにこれだからねって、息子たちにも言ってある。

このように、オリュムリュックは葬送に用いられ、モスクへ寄進される絨毯である。寄

進が神を喜ばせる善行であるという視点に立つと、これを威信財とするには異論もあろう。しかしCの例のように、それは善行であると同時に、村の人びとに「見られること」「見て思い出されること」が強く意識されるものでもある。また、それは「見られること」によって、経済的威信のみならず、信仰に篤いという社会的・宗教的威信の表現ともなるだろう。

(4) 現金獲得源 (商品)

手織り絨毯は、もちろん商品として仲買人に売却され、現金を得るための手段でもある。カラヂャヒサル村へは、ミラス市からのみならず、ムンヂュラル Mumcular や県都ムーラ、イズミルからも仲買人が買い付けに来る。村へ仲買人が来るのは週3、4回であるが、各仲買人が実際に取り引きする世帯はおおよそ決まっていることが多く、各世帯へは1、2ヶ月に一度程度来訪がある。値段の交渉は夫や父親など世帯の男性が一切を仕切ることになれば、家長の妻など女性に権限が握られ、幾人かの女性が近隣から集まって交渉に意見をしながら参与することもある。2006年11月当時、カラヂャヒサル村の手紡ぎ天然染色の絨毯は、1m²あたりに換算しておよそ185YTL（当時のレートで約15,000円）であった。世帯収入における絨毯による収入の割合は、決して高くないが、必要な時にいつでも換金可能な市場価値を有するものという認識は、広く共有されている。

(5) 蓄財の手段

絨毯は、換金可能性という性質を常にもちうる以上、これを所持しておくことは蓄財の一形態である。ミラス地方の絨毯の織り手は通常、織る段階ではその絨毯の目的を設定しない。新しく織り上がった絨毯は、とりあえず取っておかれたり、艶を出すために順次替えながら使用されたりする。それらの絨毯はすべて、いつでも商品や威信財に転化しうるものである。この「在庫」の絨毯が潜在的に帯びる商品性によって、絨毯は村の生活に適った蓄財の手段となっている。もちろん金 (gold) や、銀行預金をどの世帯も貯蓄の手段としているが、それらを利用して現金を手にするには、ミラス市の貴金属店や銀行に行かねばならない。交通費もかかる上、半日仕事である。ところが、絨毯ならば家にいながらにして仲買人によって現金化が可能である。インフレーションが起こる現金²⁶⁾のように、価値が目減りすることもあまりない。人びとは在庫の絨毯をめぐって仲買人と交渉を重ねるが、実際に合意が成立して売却されるのは、その世帯に日常外の支出の生じた時が多いようである。絨毯は、世帯の日常生活を支えるための商品というよりむしろ、非常時に換金するための貯蓄という意味合いが強い。

以上、多少回り道であったが、村落内における絨毯消費一般の様相を概説した。絨毯は、生産者である村の人びとにとって、商品であるばかりか、使用財であり、威信財であり、蓄財の手段でもある²⁷⁾。以下においては、これら消費の領域に注目し、花柄絨毯がいかに人びとによって差異化されているかを検討する。

表1 カラチャヒサル村家庭30戸とモスクにあった手織り絨毯の内訳
(2009年7月、モスク内については2006年11月)

用途 \ 柄	花柄絨毯 (うち手紬ぎ)	ミラス型 (うち手紬ぎ)	花柄絨毯の全体 に占める割合
持 参 財	35点 (27点, 77%)	44点 (20点, 45%)	44%
オリウムリュック	18点 (18点, 100%)	6点 (3点, 50%)	75%
そ の 他	82点 (43点, 52%)	103点 (18点, 17%)	44%
合 計	135点 (88点, 65%)	153点 (41点, 27%)	47%

※その他とは、調査時点で使用中のものと用途不特定の在庫。商品、使用財、場合によっては持参財やオリウムリュックにもなりうる。注23も参照のこと。

5-2 「我々の絨毯」、花柄絨毯の使われかた

カラチャヒサル村の花柄絨毯が、「売れない」「よい値がつかない」ながらも、織られ続けることを理解するには、村落内での消費に着目する必要があると指摘した。表1は、カラチャヒサル村中心部の30戸と、また村のモスクの床に敷かれていた絨毯（機械製は除く）について、その模様のタイプと絨毯の用途、用いられたパイル糸の生成法別²⁸⁾に集計したものである。サンプル数が十分に多いとは言えないものの、ある程度の傾向はつかむことができる。

まず、威信財のひとつであるオリウムリュックには、花柄絨毯が選ばれやすい（75%）という顕著な傾向を指摘できる。また、各列の下段パーセンテージを比較すると、ミラス地方のデザインよりも花柄絨毯において、手紬ぎ天然染色の糸が用いられることがかなり多いことがわかる。ミラス地方のデザインには、かなりの手間が省略できる、あらかじめ染められて紡がれた機械製既成糸が好んで用いられている。これらのことは、どのように考えられるだろうか。

オリウムリュックは、寄進が善行であるという宗教的動機づけによるものであるとともに、他者に「〔よく〕見られる」「見られて当人が偲ばれる」ことが重視され、威信の表現でもあると指摘した。そして遺体に掛かった、あるいはモスクに敷かれた絨毯を見て村人たちによって特定の個人が想起されるには、花柄絨毯は有利な特徴をもつ。それは、世帯ごとに柄が少しずつ異なるという特徴である。前出のアフメット氏によれば、女性たちはユダヤ人たちの工房閉鎖後、各戸に散逸した1枚ずつ異なる柄見本絨毯を、他人に見せないようにして織り続けてきたという。しかしこれらの古い柄見本の模様は、特に複雑であるため、1-3目ごとに逐一色を変え、目数を数えながら常に見本を参照せねばならず、作業効率は極めて低い。また、それらはあまりに細かな模様であるため、工場紡績の硬くて太い糸ではあまり目の詰まった絨毯を織ることができず、織り上がっても柄が見本と同じように見えなくなってしまうという。

現在は実際のところ、当時の柄見本に忠実に織られることはごく例外で、通常は各戸の花柄デザインの複雑に入り組んだ線がやや単純化され³⁰⁾、オリジナルから少々デフォルメさ



写真4 未婚の娘と母二人だけで、花柄絨毯を織る様子。娘の脇に、参照するための花柄絨毯が内表にして巻いてある（絨毯は裏側を見て目数を数える）。

のヴァリエーションについて、どの世帯のものを一目で特定できるわけではないが、親戚や隣人、懇意の世帯のデザインは認識している。それぞれの花柄は、死者の周りの大切な人びとに、死者を思い起こさせるのに格好のものとなりうる。他方、ミラス地方のデザインは、各戸に共通するどころか、広く同地方の他村にも共通している。それは、「私の」絨毯として選ぶ柄としては、あまりに標準的であるだろう。

また、花柄絨毯は、ミラス地方のデザインの絨毯よりも使用されるパイル糸に手紡ぎのものが用いられやすいという傾向も見られた。ここで糸の紡績について多少の説明が必要である。カラヂャヒサル村で織られる絨毯には、手紡ぎの糸が用いられたものと、工場紡績の既成糸が用いられたものがある。手紡ぎの糸は、羊毛を周辺の牧夫か羊毛問屋から購入し（1YTL/kg = 約82円、以下値段はいずれも2006年12月当時）、村内の簡易作業場で熱湯と洗剤で洗って脂と汚れを落としもらい、それから繊維をほぐすように梳いてもらう（2.5YTL/kg）。そのあと、自分で気長に錘を用いて紡ぐ。あるいは、村のベテラン老年女性たちに、お金を払って紡いでもらう³¹⁾（5YTL/kg）。工場紡績の糸は、あらかじめ人工染料で染められたものが紡績工場で機械によって紡がれ、1kg単位で束になってミラスの糸商や絨毯仲買人によって販売される（5-5.5YTL/kg）。つまり、手紡ぎの白糸を自分で紡がずに手に入れると、8.5YTL/kgとなり、あらかじめ染められた工場紡績の糸なら、5-5.5YTL/kgである。手紡ぎでも自分で紡ぐならば原料費は3.5YTL/kgとなるが、いずれにせよそれに加えて購入が一部必要な染料代、染色の手間、そして何より1kg紡ぐのに3時間はかかる気の遠くなるような作業を考えると、手紡ぎの糸の使用にはコストがかかる。

れた花柄が織られる（写真1（左）と2を比較参照）。それでもなお、他村で日常的に行われているような、世帯間での柄見本の賃借も、世帯外の人との労働交換も、カラヂャヒサル村では現在に至るまでまったく行われない（写真4参照）。各戸の織機は、摂氏40度を超える日のある夏場でも風通しのよい軒先やバルコニーに設置されず、客の出入りしない小部屋に据えられたままである。

このように、絨毯生産が世帯で完結し閉じられているせいであろう、デフォルメされた花柄もまた、構図や色調こそ互いに共通しているものの、世帯ごとにヴァリエーションがある。これは、ミラス地方の数々の典型的モチーフが、世帯間でも村を越えても、ほぼ一帯で統一されているのとは、対照的である。もちろん村人たちがすべて

それでも、特に中年以上の女性には、「糸に染みついたあの機械の油の臭いがどうしても耐えられない」とか、「手触りが硬すぎて織るとき手が痛くなる。できた絨毯も硬くなるから嫌だ」と、工場紡績糸を嫌悪する人も多い。あるいは、「所詮、出来合い (*hazır*) を使うのは、安易さに逃げること (*kolaya kaçmak*) だ (50代既婚女性, 他多数)」とか、「[工場紡績の糸を用いるのは] あまり正しいことではないから、恥ずかしい。嫁入り道具にはできない (40代既婚女性)」などと他人の評価や絨毯の真正性を意識した意見もあった。彼女らはもちろん、手紡ぎの糸を用いた絨毯を娘たちの嫁入り道具に持たせた／持たせるといふ。また、機械紡績の糸で織ったことはあっても、それらは既に売却されたり、売るために取っておかれたりしていた。手紡ぎの糸を絨毯に使用することは、「[ただ糸を買ってきて織るだけでも手間なのに] さらに手間がかかる (*daha da zahmetli*) こと」であり、「私はそれほど頑張れない (*O kadar uğraşamam*)」という人も多い。しかし、手間がかかると認識されているからこそ、「働き者」で「器用」であることのアピールとなる持参財の絨毯や、「見られる」ことが意識されるオリュムリュックには、できるだけ手紡ぎの糸を用いたいという共通の思いがある。そして、既述のとおり自身や娘の甲斐性をアピールしたり、死後も人びとに思い出されるための絨毯には、花柄絨毯が選ばれることが多い。結果的にミラス地方のデザインのものに比べ、花柄絨毯には、手紡ぎ糸が用いられやすくなる。彼女たちにとって、花柄を選ぶことも、手紡ぎの糸を使用することも、共にその絨毯への織り手自身の「思い入れ」の強さを表現する作法と言えるのではないか。

19世紀末、ミラスの村落部でほとんど偶発的に起こったであろう「異教徒」との、「近代西欧」との接触、それは村にさまざまな変化をもたらした。衝突と受容を経て、その変化は社会経済のマクロな変化とも同調しつつ、村落の人びとの「伝統」の一角に根をおろしている。

6 討論

以上、トルコ絨毯というモノが、異なる文化的宗教的背景をもった人びとのエイジェントとして発達し、変遷を遂げてきた様子を現代の絨毯生産地域の村落の事例を通じてミクロに考察した。絨毯に魅せられてモノが動き、人が動く。その過程で随所に「コンタクト・ゾーン」の出現が促されてきた。

おわりに、討論として、プラット [Pratt 1992] の視点や、それを人類学へと拡張することを提起した田中 [2007] の視点に立ちかえっておきたい。プラットは、「コンタクト・ゾーン」を、地理的・歴史的に分離していた人びとが出会い、継続的関係をもつ空間 [Pratt 1992:4] としている。そこでの関係性とは、植民地主義や奴隷制度、あるいは旅行者と旅先の人びとの関係など、不均衡な権力関係に特徴づけられる。では、本稿でとりあげた、トルコ絨毯をめぐる異文化の邂逅の事例は、どのように位置づけられるであろうか。まず、第2章で説明した18世紀以前は、絨毯というモノを介して、ヨーロッパ人が(オスマン)トルコというイスラーム世界と出会うという状況であった。これは、プラットの想定するコンタクト・ゾーン「以前」の、「地理的・歴史的に分離していた」時代で

あろうか。そうとも断じきれないと筆者は考える。なぜなら、その間はアルメニア人やユダヤ人といった人びとによる、「交易離散共同体」[カーティン 2002]のネットワークによって密に結ばれていたし、貿易のみならず、戦争、特使の往来、友好的招聘、旅行といったさまざまな形でオスマン帝国とヨーロッパ間の人の往来は大変盛んであったからである。しかも、その文化の邂逅は、空間的には主に（ヨーロッパから見た「周辺」ではなく）ヨーロッパ側で行われていた。正直、筆者はこの時代の状況を「コンタクト・ゾーン」概念のなかで、どのように位置づけるべきか、よくわからない。そのかわり、プラットのコンタクト・ゾーン概念の時代的射程に対して、ささやかな疑問を呈しておこう。歴史学者の山下範久は、グローバル・ヒストリーという視点を提示するなかで、世界システム論の視座をヨーロッパ中心主義的であると批判している。

世界システム論のパースペクティヴのなかで、ヨーロッパに形成されたシステムによってその外部にあるシステムが包摂されて行く過程が、ヨーロッパ世界による非ヨーロッパ世界の一方的な関係としてイメージされるのは、両者の接触が、近代と前近代の接触として概念化されているからである。（中略）そもそもグローバルな視野で16世紀の世界を見渡したとき、経済活動の中心は、質量の両面で圧倒的に非ヨーロッパ世界に傾いていた。ヨーロッパ人は、アジアに広がる豊かな経済活動の場への参入に懸命だったのである。（中略）世界システム論による世界史の時空的分節化は、近代と前近代の分割を特権化し、それをヨーロッパという地理的な実体に投影しすぎていた。「近代的なヨーロッパ」と「前近代的な非ヨーロッパ」との対照は、近世のグローバルな同時代性、つまり近世における空間的な連続性を極端に過小評価してしまうのである [山下 2008:83-84]。

これは、そのまま、コンタクト・ゾーンの出現を18世紀後半以降に見るプラットの歴史の切りとり方への批判とすることができよう。そして、これは昨今の「世界システム論」を土台にした「グローバル化論」にとっても、示唆に富んだ論点である。東西の陸上・海上交易がともに非常に盛んであった近世がなかったかのように、18世紀後半に始まるインド植民地化の時期以降を「コンタクト・ゾーン」の発現期として切りとることに、筆者は積極的な意味を見いだすことができないでいる。筆者が15-19世紀初頭までのトルコ絨毯交易史における「接触」をプラットの枠組みに沿って理解しようとしたときの困惑は、山下の言う、「近代と前近代の分割の特権化」「近世における空間的な連続性の過小評価」に根拠を求められるだろう。田中雅一は、「コンタクト・ゾーン」がコロニアルな状況だけでなく、むしろポスト・コロニアルな状況で、また急速なグローバル化状況で、いたるところに出現すると考えるべきだと主張した [2007:32]。筆者はそれに強く賛同するとともに、植民地化以前の時代にも拡大することができると提案したい（むろん、これはもう人類学者の守備範囲からはみだしてしまいそうな時代ではあるが）。

また、第4章において考察した、ミラス地方の一村落における「接触」についても、付言しておきたい。これは、プラットの言う、「非対称的關係」が出現する状況であった。

産業資本の側から突然村へやってきて、村の女性たちの「雇用主」となったユダヤ人たち、そしてデザイナーとして重用されたギリシャ人。それは、「雇用者」「被雇用者」の関係としてみれば、「ゲスト」である雇用者が支配側と理解される。しかし、オスマン帝国の法枠内では、立場が逆転する。「ゲスト」はあくまで「被保護民」であり、「ホスト」である臣民の下に位置づけられた存在である。これは法枠内の「たてまえ」だけだったわけではない。実際にオスマン帝国領内で両者が出会えば、「被保護民」が目を伏せて道を譲らねばならなかったなど、日常的に非対称関係を確認するような行動様式もあったと言われる。根底的な不平等を前提としながらも、異教徒との共存が当時としては例外的にオープンに認められていたという、オスマン帝国におけるムスリムと異教徒の関係〔鈴木 2007〕は、19世紀を待たずとも、同一の2項のグループ間で支配／被支配の関係が状況依存的に反転しうる、極めて相互交渉的なものだったのではないだろうか。³²⁾

プラットは、このような非対称的／不均衡な関係の中で、従属的な立場にある側（彼女の想定では非西欧側）が、支配者側の表現を自らの表現に取りこみ、自己表象に用いる試みを「トランスカルチュレーション」と名づけて論じた。西欧資本によってカラヂヤヒサル村にもたらされ、当時西欧に商品として売るためにギリシャ人がデザインした花柄絨毯は、村人たち自らのものとして取りこまれ、商品経済から距離を置いた形で彼らの伝統的習慣のなかに定位されている。そこで行われてきたことは、（近代資本システムにおける）支配的立場の人間から伝えられるさまざまなモノや表現から、従属的立場の人間が、何をどの程度選びぬいて吸収し何のための用いるのかを決定し、新しい何かを創出してゆく過程〔Pratt 1992:8, 188〕であると言えよう。すなわちこれは、プラットの言う、「トランスカルチュレーション」の過程そのものである。

追想

オリウムリュックへの特別な思い入れが感じられたCの語りには、「私の」「私が」「自分で」という言葉が繰り返し用いられていた。インタビュー当時、それが筆者の耳に大変新鮮に聞こえたのを鮮明におぼえている。村の人びとと行動を共にし、女性たちの日々の会話において、主語として「私」ではなく「私たち」という1人称複数ばかりが用いられることに、筆者自身が驚きを感じなくなっていた時期であった。すると「私」という主語を繰り返し用いて語る老年女性が、そのときの筆者には奇異とさえ映った。少なくとも1960年代以前出生の女性にとっては、個人の単位で行動することが極めて限られるのが、村の生活である。誰もが同様に畑仕事と家畜の世話、あるいは家事育児に追われ、大同小異の家屋に住み、やがて老いて死んで行く。そのようななかで、ヴァリエーションが保持され、認識されている花柄絨毯だけは、「私の」と呼ぶにふさわしい単一性を有し、かつ共同体の人びとの目に触れる「「私」の生きた証」「私」という存在の表現」となりうるのではないか。そしてCはオリウムリュックという「伝統的習慣」のなかに、それを表現しようとした。もちろん、彼女たちは自らの言葉でそのような「自己の覚醒」を語ることもない。論理の飛躍の誹りは甘んじて受けよう。が、それはそもそも実証不可能な事項であるとも思う。ともあれ、手間ひまかけて「売れない」花柄絨毯を織り続ける人びとを

見、Cのような語りを聞くにつけ、筆者にはそのように思えてしまうのである。そしてその、彼女らの生きた証となる花柄とは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、市場経済の彼方からやってきた人びととのコンタクトによって、生み出された柄なのであった。

追記

本稿のもととなる調査は主に、2005年1月から2006年12月の間に行った。この調査は、文部科学省長期留学生派遣プログラム「アジア派遣」によって、可能となった。また本稿に関連する大枠の論点整理の段階において、京都大学大学院人間・環境学研究科の菅原和孝教授、田中雅一教授、山田孝子教授、国立民族学博物館の吉本忍教授には、ゼミや学会、面談等での確かなコメントやご意見を賜った。各位に改めて感謝の意を表します。最後に、調査地や留学先で大変お世話になった数多くの人びとにも心から感謝します。

注

- 1) 杉村棟は、絨毯を狭義の絨毯と広義の絨毯とに分け、前者を「羊毛、ないし絹を主要な素材とした毛羽のある手織りの敷物」、後者を「〔狭義の絨毯に加えて〕織り組織をもたない不織布のフェルト（毛氈）や綴織（キリム）などの平織りの敷物を含めることがある」としている（〔 〕内筆者）[杉村 1994:8]。遊牧民を祖とするテュルク系諸民族の織物において、パイル状敷物と連続する形で平織りやフェルトも重要な位置を占める。ただし、文化横断的な流通や消費という本稿の主題に一貫して関わってきたのはパイル絨毯であるため、本稿で扱う絨毯は、前者の狭義の絨毯に限定する。なお、「絨緞」という表記もあるが、本稿では「絨毯」に統一した。
- 2) 同時期の、東地中海とヨーロッパ間の交易については、深沢 [2007:157-202] に詳しい。アルメニア人の活躍、染料や媒染剤の交易についても詳細な記述がある。
- 3) ベッリーニは、当時のオスマン皇帝メフメト2世の招聘で1479年にヴェネツィアからイスタンブルへ出向き、16ヶ月間滞在した。その間皇帝の肖像画を含む数多くの作品を宮廷内で描いた。
- 4) 中世の手仕事を賞賛し、生活と芸術の一体化を目指したウィリアム・モリスは、とりわけペルシア絨毯に心酔し、そのデザインを熱心に研究し、イラン人に教えを請うて自ら絨毯を織ることもあった [坂本 2003]。モリス商会の代表的な壁紙やテキスタイルのデザインには、ペルシア絨毯との明らかな類似が見られる。
- 5) ヨーロッパに至る、当時の絨毯の流通ルートの拠点は、ペルシア絨毯についてはイスタンブル、トルコ絨毯についてはイズミル（イズミール）というように、特化していた [坂本 2003]。よってイズミルからの絨毯の輸出量は、アナトリア全土で産出された絨毯の輸出量にほぼ等しい。
- 6) これら6商会の国籍は、文献により異なり不明である。最も詳細な文献によれば、これらの商会は、P. De Andrea Co., G. P. ve V. Baker, Habif ve Polako, Sydney La Fontaine, T. A. Spartali Co., Sykes Co. の6つであった [Sönmez 1998:296]。
- 7) ミフラーブとは、アラビア語で「^{せいがん}聖龕」と訳される。通常モスク内のメッカの方向の壁に施されるくぼみ状の部分指し、それは信徒に礼拝の方向を示す。その形状は預言者マホメットがアッラーの言葉を聞いた洞窟を模しており、礼拝用の絨毯などにこの形状を平面的に描いた模様（すなわちミフラーブ文）が頻繁に用いられる。
- 8) このタイプの絨毯は主にカラヂャヒサル村で織られるが、まれにオレンやカラヂャヒサル近隣の数村においても多少単純化されたカラヂャヒサル型が織られることがある。村から婚出した者の持参財を柄見本として広まったのであろう。
- 9) 同村へのアトリエ設置年とされる1896年は、Quataert [1986, 1993, 1994] や Sönmez [1998] らの記述における同社の設立年、1908年よりも古い。6商会の統合時が設立年とされており、カラヂャヒサル村にアトリエが開かれた当時は統合前の OCM の前身であった可能性も十分に考えられ

- る。あるいは、OCMとは無関係の、ウシャックに本拠を置く絨毯製造会社であったかもしれないが、そのあたりの事情は未解明である。
- 10) アフメット氏は2007年、急逝された。村の絨毯の識者とされる氏が健康であったときに聞き取りの機会が得られた幸運に改めて感謝するとともに、ご冥福をお祈りする。
 - 11) オスマン帝国領内の住民は、その出自ではなく信教の別によって区別されていたため、ユダヤ人というよりユダヤ教徒と訳するのが本来は正確であろう。ただし本稿では、オスマン帝国から「トルコ人」による国民国家へ移行の過渡期を扱うこともあり、その訳の厳密性を保証するのが困難であるため、一括してYahudiler = ユダヤ人とした。アルメニア人、ギリシャ人についても同様。
 - 12) アフメット氏は、祖父がギリシャ出身だったことを理由に、「ユルギュット」とはラテン語ではないかと憶測していた。
 - 13) 絨毯は、一目ずつ水平方向に織られていくため、平面的に模様を認識するだけでは複雑な模様を織ることはできない。そこで、すでに織られた絨毯の裏側や、織目を一目ずつ方眼紙に起こしたものを見本として用いて、目数と色を確認しながら模様を形成してゆく。工房では、各モチーフの一部を集結させた柄見本絨毯を用いていた。
 - 14) オスマン帝国時代のズインミー制による異教徒の扱いや、ムスリムとの関係性、あるいは帝国末期の変化などについては、鈴木〔2007〕参照。
 - 15) 現在の絨毯の機は、鋼鉄製が大半であるが、当時は木製であった。鋼鉄製は経糸の張力を強く一定に保つのに優れ、歪みの少ない織りあがりになる。ウシャックから持ちこまれた機は鋼鉄製であったとされる。「事件」において機は破壊されたとアフメット氏は語ったが、その後各戸で用いられたし、鋼鉄製のものは壊すのは容易でないため、実際には機に張られていた製作途上の絨毯の組織が破壊されたのであろう。しかし、襲撃そのものはユダヤ人を村から去らせるのに十分な効果があったと思われる。
 - 16) これが手紡ぎであったか、機械紡績であったかは不明。ウシャックにおいて、この時期はちょうど問屋制家内工業による手紡ぎ糸と、大規模な工場における機械紡績の羊毛糸が共に産出されていた時期にあたる。両者は拮抗し、1908年3月には、工場での機械紡績の躍進によって仕事を奪われた手紡ぎ作業の担い手たちによる、工場を標的にした大規模な暴動が起きてもいる〔Quataert 1986〕。
 - 17) 機械製の大型絨毯が用いられる理由としては、1. 部屋の大きなスペースに何枚もの絨毯を組み合わせて敷きつめると凸凹が出たり、隙間にゴミが入り込むなど管理の煩雑さ、2. 機械製の絨毯は安価なために汚れたり古くなったりすれば頻繁に買い替えられる、などが挙げられた。調査当時、カラヂヤヒサル村には、月に2、3日程度、ミラス東方の街ヤターアンから、行商人がワゴン車で機械製の絨毯の販売に来ていた。
 - 18) これについても慣用句で、「家を建てるならレンガから、娘をもらうならムーラから」(*Ev yaparsan tuğladan, kız alırsan Muğla'dan*。つまり、家ならレンガで建てるがよい、嫁はムーラからもらうがよい、なぜなら彼女たちは嫁入り道具としてあらゆるものを揃えて婚入してくるから)と言われる。他地域では、部屋ごと、品目ごとに嫁方婿方で折半することが多いのに比べ、ムーラ県下一帯は嫁入り道具の慣習が非常に盛んである。
 - 19) ちなみに、どんなに貧しくても、「白絨毯(約1×1.6m)2枚、セツチャーデ(*seccade*)サイズ(約1.2×1.8m、礼拝用絨毯のサイズ)以上のサイズが2枚と小型絨毯(*paspaslar*) (40-50cm四方)」数枚は娘に持たせる最低基準とされている。しかし、この語りを筆者が聞いた際の嫁入り道具には、この基準の2倍程度の絨毯があり、実際にはこの「最低基準」を満たせばぬかりないとは考えられていないらしい。
 - 20) チングネとは、北インド一帯を起源とするロマの人びとを指す。トルコにはロマ系人口が全土に居住しており、総数は数十万人規模とされる。ミラス地方のチングネたちは、主に1つの村と1つの町の2つの地区に集住しており、彼らの間ではほぼ内婚制を維持し、楽師を主たる生計の手段とする世帯がほとんどである。なお近年ではトルコ語の「チングネ」という表現を、やや侮蔑的だとする向きもあるが、日常会話ではもちろんのこと、メディアなどでも一般に用いられている。

- 21) 他にも、室内装飾の造花や、大型家電一式が詰まった部屋の鍵などをめぐって同様な儀礼的交渉が行われることも多々あるが、対象に何が選ばれるかは家によって異なる。同地方の村落で、必ず「交渉」が行われるのは、嫁入り道具搬出日の絨毯と、花嫁が生家から連れ出される日の長持(sandık)をめぐってである。
- 22) この習慣の衰退の直接の原因は不明であるが、手織り絨毯の市場価値が高まった時期と重なっていることは指摘できる。また、2004と2005年に一帯のモスクに敷かれていた寄進された絨毯が、丸ごと盗難に遭うという事件が3件続き、それを受けて他村でもモスクに残る寄進された絨毯を各戸に戻したり、新たな寄進を断ったりするというケースがあった。
- 23) 2006年11月時点。ただし絨毯は古いものの上に新しいものが敷かれ、実際には何層にもなっていたが、それをすべてめくり上げて調べることはできなかった。そのため、確認したのは最上面に現れている計28枚のみである。また、機械製絨毯は、村に出入りする機械製絨毯の行商人(注17参照)が、モスクに寄進したものだという。その効果を考えるならば、一種の広告のような役目もあるだろう。
- 24) 実際にはカラヂャヒサル村でも生前からオリウムリュックを特別に用意しておくことはあまり一般的でなく、死者の家の在庫の絨毯から1枚が選ばれることが多いようである。
- 25) カラヂャヒサル村では、その割合が6%の世帯を確認したのみである。同地方の比較的絨毯生産が盛んなある村では、おおよそ5~30%を占めたが、世帯におけるツーリズム関連の出稼ぎ者の有無、隔年結果をするオリーブの収量、世帯成員の変化などにより、世帯間/年度間の差異が著しかった。その事情はカラヂャヒサル村にも共通すると予想される。
- 26) トルコは、90年代に年インフレ率100%を超えるほどの激しいインフレーションを経験している。2000年代には収束したが、それでもややインフレーション傾向が見られる。
- 27) それらの属性は決して固定的なものではなく、同じ1枚の絨毯が何かのきっかけで他の属性を帯びることが頻繁に起こる。これは、「モノの伝記」という視点を提示したコピトフ [Kopytoff 1986] の論点を検討するに格好の対象である。これについては、今後別稿にて考察したい。
- 28) 完成品の絨毯から、パイル糸が手紡ぎか機械紡績かの判断は、筆者のみでは難しいことが時折あった。よって、所有者の家の女性あるいはモスク内を案内してくれた絨毯に詳しい男性2名に判断を任せた。
- 29) 機械紡績の糸は、ミラス地方の村落部には1960年ごろから徐々に浸透し、現在の人工染色済みの紡績糸は、1980年代に使用が一般化した [Jirousek 1994]。ただし工場紡績糸自体は、(まだ粗悪品であったものの)戦前から生産されていた。トルコ共和国建国(1923年)後、国内企業優遇政策に押されて、1930年代のうちにかつて隆盛を極めた OCM を含め、外国企業はトルコ国内の絨毯産業から撤退した。それらに代わって、トルコの国営企業スュメル銀行 Sümerbank (1933年設立)と、それに続くいくつもの民営企業が出現し、次々とウシャック、バルケスイル、ウスパルタなどに羊毛加工工場、絨毯工場を建てた。機械紡績の糸はさまざまな改良が重ねられ、徐々に西アナトリア各地の絨毯伝統的産地にも普及した。
- 30) この単純化の方法は、見本の絨毯の上に薄い方眼紙を置き、透けて見える主要な輪郭線を手描きで写しとり、あとで見本を見ながら彩色するというものである。方眼紙のマス目ひとつひとつが、絨毯の一目一目に該当し、織り手はその目数を数えながら、柄を複製することができる。同様に写真やイラストを転写して新奇な絨毯のデザインを起こして織ることは特に未婚女性の間では時折行われる。しかしこれらは総じて商品価値が皆無と言ってよい。
- 31) この錘を用いた、手紡ぎができるのは、カラヂャヒサル村では調査当時40代以上の女性たちに限られた。手紡ぎの糸を使用したいが紡ぐ人が世帯にいない場合は、老年女性に代金を払って頼むこととなる。
- 32) このような関係の状況依存的反転は、(日本を含む)近世以前の世界各地における、商人と農民や支配階級との関係を考えても、同様であっただろう。

参考文献

- カーティン, フィリップ・D. 2002 (1984) 『異文化間交易の世界史』(田村愛理・山影進・中堂幸政 訳) NTT 出版。
- クセノス, ニコラス 1995 (1989) 『稀少性と欲望の近代——豊かさのパラドックス』(北村和夫・北村三子訳) 新曜社。
- 坂本勉 2003 『ペルシア絨毯の道——モノが語る社会史』(ヒストリア第17巻) 山川出版社。
- 杉村棟 1994 『絨毯——シルクロードの華』朝日新聞社。
- 鈴木董 2007 『ナショナリズムとイスラムの共存』千倉書房。
- 田中雅一 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』1: 31-43。
- テズジャン, ヒュルヤ 1980 「解説 トルコの織物, 絨緞, キリムに使用される染料」護雅夫監修 『トプカプ宮殿博物館——宮廷絨毯』(高橋昭一・護雅夫訳) トプカプ宮殿博物館全集刊行会, pp. 235-237。
- 深沢克己 2007 『商人と更紗——近世フランス＝レヴァント貿易史研究』東京大学出版会。
- 山下範久 2008 「世界システム論からグローバル・ヒストリーへ」水島司編 『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社, pp. 77-90。
- Abuzer, Kızıl 2002 *Uygarlıkların Başkenti MİLAS Mylasa ve Çevresi*. Milas: Milas Belediyesi Kültür Yayınları.
- Akarca, Aşkıdıl & Turhan Akarca 1954 *Milas Coğrafyası, Tarihi ve Arkeolojisi*. Istanbul: İstanbul Matbaası.
- Anmaç, Elvan 1994 İngiliz Sermayesinin Batı Anadolu Halıcılığına Etkisi ve Şark Halı Kumpanyası. In Kültür Bakanlığı Halk Kültürlerini Araştırma ve Geliştirme Genel Müdürlüğü & Dokuz Eylül Üniversitesi Rektörlüğü eds. *Kamu ve Özel Kuruluşlarla Orta Öğretimde, Üniversitelerde El Sanatlarına Yaklaşım ve Sorunları Sempozyumu Bildirileri*. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, pp. 5-15
- Aslanapa, Oktay 1988 *One Thousand Years of Turkish Carpets*. Istanbul: Eren Yayıncılık ve Kitapçılık Ltd.
- Frances, Michael 2007 Erken Türk Halılarının kısa Tarihi. In *Tanrı'ya Adanmış Halılar*. Istanbul: Sakıp Sabancı Müzesi, pp. 39-49.
- Ionescu, Stefano & Andrei Kertesz 2007 Osmanlı halıları ve Transilvanya. *Tanrı'ya adanmış halılar*. Istanbul: Sakıp Sabancı Müzesi, pp. 31-37.
- Issawi, Charles 1980 *The Economic History of Turkey 1800-1914*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Jirousek, Charlotte 1994 Market Effects Upon the Design and Construction of Carpets in the Milas Region of Southwestern Turkey, 1964-1994. In *Contact, Crossover, Continuity: Proceedings of the Fourth Biennial Symposium*: Textile Society of America. (http://textilesociety.org/symposia_1994.htm. 2009年9月20日閲覧。)
- Kopytoff, Igor 1986 The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In Arjun Appadurai ed. *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. New York: Cambridge University Press, pp. 64-91.
- Mack, Rosamond E. 2001 *Bazaar to Piazza: Islamic Trade and Italian Art, 1300-1600*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Ölçer, Nazan 2007 Sunuş. *Tanrı'ya adanmış halılar*. Istanbul: Sakıp Sabancı Müzesi, pp. 11-13.
- Quataert, Donald 2000 *Consumption Studies and the History of the Ottoman Empire, 1550-1922: An Introduction*. Albany, N. Y.: State University of New York Press.
- 1986 Machine Breaking and the Changing Carpet Industry of Western Anatolia, 1860-1908.

- Journal of Social History* 19 (3) : 473-489.
- 1993 *Ottoman Manufacturing in the Age of the Industrial Revolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ed. 1994 *Manufacturing in the Ottoman Empire and Turkey, 1500-1950*. Albany, N. Y.: State University of New York Press.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. London and New York: Routledge.
- Sönmez, Zeki 1998 19. Yüzyıl Sonlarında Türk Halılarının Avrupa'ya İhracı Konusundaki Gelişmelere Kısa Bir Bakış. In Aktaş Yasa, Azize, Serap Leloğlu Ünal, Şebnem Ercebeci & Erol Kalender eds. *Türk Soylu Halkların Halı, Kilim ve Cicim Sanatı Uluslararası Bilgi Şöleni 1996 Bildirileri*. Ankara: Atatürk Kültür Merkezi Başkanlığı Yayınları, pp. 289-299.
- Seyirci, Musa 1994 Turistik Amaçla Üretilen Döşemealtı Halılarında Bozulmalar. *Kamu ve Özel Kuruluşlarla Orta Öğretimde, Üniversitelerde El Sanatlarına Yaklaşım ve Sorunları Sempozyumu Bildirileri*. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, pp. 403-409.
- Taşkıran, Bilgi 2004 *Sosyal, Siyasal ve Ekonomik Yönüyle Milas (1923-1960)*. Milas: Milas Belediyesi Kültür Yayınları.
- Tüfekçi, Nevzat Çağlar 2005 *Milas ; Kentimiz Sevdamız ve Hüznümüz Bizim*. Muğla, Turkey: Anıl Ofset& Tipo Matbaacılık.